



ワークショップ

グループ1 患者さんへの医療情報の提供

ディスカッションは、「実際に患者さんへのサービスを行っている図書室は？」という質問から始められた。参加者のうち、「患者学習室」の名称で子どもを対象に絵本などを提供し、司書とボランティアで運営しているところが一室あったが、「医療情報の提供」を行っている施設はなかった。しかし、「患者さんへの医療情報の提供」は今日的なトピックとして取り上げられることが多く、また実施施設も増えていることから、その意義やそれにまつわる問題点について討議が行われた。

今回、提起された主な問題点は、①提供する情報に関して誰が責任をもつのか、提供する情報が患者さんの要望と合っているか、その質はどうか、②老人や子どもなどのように、自力で情報を得ることができない患者さんたちへの情報提供をいかにしていくのか、③個人情報保護法の施行による問題、④セカンド・オピニオンの問題、などであった。特に、①については、薬の処方箋ならぬ「本の処方箋」として主治医が本を推薦する病院もあることが紹介され、間違った情報提供をしないためにも、このような医療専門職を含めた責任ある情報提供体制が必要ではないか、また、医療専門職、ボランティア、患者との接点としての司書の役割や、こうした役割を果たすことは、病院における司書の位置づけを向上させることにもつながるのではないか、などが話し合われた。

また、これから必要になってくるものとして①COML(コムル)のような情報を蓄積、共有し、フィードバックしていく機関や体制、②CLS(チャイルド・ライフ・スペシャリスト—子どもへの病気、治療の説明、病棟での遊びの援助、家族への援助を行う。日本では数カ所だけ置かれている)のような専門職についても話題提供があり、今後のあり方を考える上で参考になったと思う。



さまざまな情報があふれ、誰もが手軽に情報を入手できる今、患者さんへの医療情報の提供に関してはまだまだ多くの問題が内在しており、乗り越えなければいけないハードルが多いようである。しかし、このディスカッションを通して、患者さんに対する情報提供の必要性を改めて認識することができ、それと同時に、実践に際しては医師、看護師、司書、MSWなど医療従事者間のコミュニケーションや連携を密にし、組織立った体制を作ることがまず基本ではないかと思った。

(文責：首藤 晶子／(独)科学技術振興機構 西日本支所)

グループ2 文献入手状況をどう整えていくのか

利用者の求める資料や情報を提供することは図書室の主務であり、いかに迅速に的確な情報提供ができるのかが大きなポイントとなっている。しかし、病院規模や設備などの問題から、自室の所蔵資

料の中から求める情報のすべてを提供することは不可能である。そこで、いかにして求める資料や情報をスムーズに入手できる環境を整えていくのかを話し合った。

今回のディスカッションでは、長野県内の病院図書室担当者が集まり、一部ではあるが、図書室業務や文献入手の現状を知ることができた。



まずは、病床数700床程度の大きな病院では、専任の司書も在室しており、文献に必要な情報源の設備も整っている。つまり、利用者からの申し込みにスムーズに対応できる環境である。自室にない文献の依頼先としては、日赤図書室協議会、病院図書室研究会、近畿病院図書室協議会、大学などがある。料金は依頼先によってさまざまであり、文献入手にかかった費用は個人負担であるのが現状である。

次に、病床数300床程の図書室の現状はというと、専任として図書室業務を行っているのではなく、医局や総務の担当者が兼務して行っているために、利用者からの申し込みにスムーズに対応できてはいない。所蔵資料にも限界があり、目録の整備も不十分である。文献入手のシステムについても、情報不足であるために、利用者への情報提供も思うように行われていないのが現状である。

以上のことから、文献入手をスムーズに行うためには、まず自室の図書室の環境を見直すことやネットワークなどの自助努力を行うことが大切なのではないかと考える。

現在、長野県内の病院図書室では「長野県医学図書ネットワーク（仮称）」設立に力を入れている。このネットワークの設立で、情報交換できる場をつくり、図書室担当者の知識を豊かにすることで、利用者が求める文献入手にも迅速に対応できるのではないかとと思われる。

（文責：石坂 理恵／長野赤十字病院）

グループ3 臨床研修医制度と病院図書館

臨床研修医制度と病院図書館について、参加者の所属から研修医を送り出す側と受け入れる側、その環境に必要な物、協議会としてできることは何であるかという点でディスカッションを行った。

病院図書室と研修医の現状：研修医に対する図書室利用オリエンテーションについては、司書が任されてはいるもののなかなか実施できていなかったり、指導医が研修医に簡単な説明をする程度である。その際も、“書誌事項”などの基本的なことから指導が必要な場合もある。

病院図書室の対応：インターネット環境の整備やJDream・医中誌 Web などの文献検索ツールの導入を行い、研修医が自ら資料を探せる環境を整えつつある。ただ、文献検索ツールなどの環境を整えることは病院図書館にとって大きな負担となるにも関わらず、あまり利用されないこともある。

大学の現状：学生は高年次・大学院にならないと論文を書かない傾向がある。また、国公立大学などでは実習が中心で卒論を提出しなくてもよいという学科も多く、文献と接する機会が少ない。

大学のカリキュラム：図書館を利用するような課題やカリキュラムを組むようにすることで、できるだけ学生に図書館を利用するようにもっていく。

病院図書室でできること：第22回医学情報サービス大会での天野氏の発表¹⁾のように、病院図書室は資料・データベースを持つべきであり、オリエンテーションを行うべきである。発表されたアン